

The Colloquial English of *The Catcher in the Rye*

Shunji Mukai

The Catcher in the Rye における

口語英語の研究

向 井 俊 二

個性の探求としての口語研究

The Catcher in the Rye と *The Adventures of Huckleberry Finn* は、青春の冒険と彷徨を題材にした広く読まれる文学作品として比較されるばかりでなく、同時代の口語表現の興味深い用例を豊富に含んだ素材としても共通点をもっている。1950年代のティーンエイジャーの使用語にもとづいた *The Catcher* の言語は、そのかなりの部分が現代アメリカ口語英語として市民権を獲得している。たとえばウェブスター大辞典は“horse around”に関して *The Catcher* からの“I horse around quite a lot, just to keep from getting bored.” (Penguin Book p. 25, 以下 *The Catcher* からの引用はすべてペンギン版による) を使用例として紹介している。(同辞典 p.1092) *Dictionary of American Slang* (Harold Wentworth, Stuart Berg Flexner 編, 以下 *American Slang* と略称) には28の *The Catcher* からの直接の引用がある。一つの作品から数多く引用される点で *The Catcher* がおそらく最高であろう。*The Catcher* の中で用いられて *American Slang* に記載されているものは、上記のものを含めて約130語に及んでいる。

このように語学的に興味深い対象であるこの作品は、同時に1951年の発表以来若者の間で依然衰えぬ人気を保っている。それはもともと語学的関心とは違ったところから発する人気であろうが、この作品は登場人物の会話ばかりでなく、地の文としての主人公の語りからして、すべて意識的に作り出された話し言葉から成り立っており、それがこの作品の人気の秘密である作品の芸術性から切り離すことのできぬ重要な要素になっている。

The Catcher の言語に焦点を当てた Donald P. Costello の“The Language of *The Catcher in the Rye*” (*American Speech*, October 1959, 本論文では、H.A.Grunwald 編 *Salinger*, London, 1964 に掲載されたものを典拠とする。以下ここからの引用は Costello の名をもって示す)に、Warren French は *The Catcher* に関する“the most useful article”という評価を与えた (Warren French, *J.D Salinger*, New York, 1963, p.106) が、これはこの作品に関する他のもろもろの文学批評としての分析と対等に扱った上での評価なのである。このように *The Catcher* は、作品の理解のためにも、そこで用いられている言葉に言語学的関心をもってアプローチすることを意義あらしめる、興味深い作品である。

一方、*The Catcher in the Rye* における口語表現といっても、口語表現そのものは人間の日常的なコミュニケーションの道具としての普遍性をもつものであるから、*The Catcher* において用いられている口語表現も、一般的に用いられている口語表現と、原理的には同じはずである。ただ、すべて人間には固有の語り口というものがあり、その語り口の中に一般的口語表現と区別されるその人特有の表現を発見することは可能であろう。意識的に創り出された文学作品において、登場人物が用いる言語はその人の個性・思想性の表出としてとらえることができる。従って、個人の語り口からある個性をつきとめ、その個性の表出としての言語から、逆に一般的な口語表現を推理することも可能となるであろう。

そこでこの考察も、ある個性の探求ということを中心にすえて進めてゆく。その個性とは、いうまでもなく、この作品の中心人物であり、語り手でもあるところのホールデン・コールフィールドである。

ホールデン・コールフィールド

まずホールデンの人となりについて簡単に述べよう。彼は当年16歳、ニューヨーク市で生まれ育った生粋の都会っ子である。父は会社の顧問弁護士で、セントラルパークの周辺に立ち並ぶ高級マンションの一つに住む。兄は職業作家で目下ハリウッドで映画のシナリオを書き、弟は詩の才能に恵まれていたが夭折し、妹も利発な小学生、ホールデン自身はアイビーリーグへの進学率の高いエリート高校に学ぶ。このように、ホールデンの出身は社会的階層としてはアッパーミドルクラス、文化的には高度の知識階級

ということになる。

ただホールデン自身に関していえば、彼の学業成績は甚だ振わず、そのために過去に三回学校を変わり（退学処分を受けたものと思われる）、四度目のペンシー・プレップにもいられなくなってしまふ。しかしこれは彼の資質が学業に堪えないということではなくて、ここが彼の個性そのものにかかわる点でもあるが、本気になって勉強に打込むことを妨げる精神的悩みをかかえているからである。それにもともと彼はオールラウンドに良い成績をあげる優等生タイプではなく、一芸に秀でる異能タイプということもある。

その突出した彼の得意とする分野は英語（国語）である。特に作文に優れていて、かつて彼に作文を指導したことのある教師は、ホールデンのことを“*You little ace composition writer.*” (p.190) と呼び、ペンシー・プレップにおける英語の教師も、ホールデンのルームメイトが“*That sonuvabitch Hartzell thinks you're hot-shot in English.*” (p.33) というくらいに、ホールデンの作文のうまさについては、教師の口からかなり学校中に知られている事実となっている。

しかしその一方では「要点に沿って」話をするのが苦手で、というか、そういう話し方を強要する授業に反発して「口頭表現」の科目に落第点をとってしまう。このように彼の授業を受ける態度にはかなりむらがあり、教師の評価は必ずしも一致しない。彼は“*I'm quite illiterate, but I read a lot.*” (p.22) と言う。彼の英語の力は、学校の授業よりは好き勝手に本を読むことによってつけられたようだ。彼は図書館から借り出した本が間違っていることに気がついて、読んでみて面白ければそのまま読み続けるといった、気ままな読書の旅を好む。彼はまた“*I have a lousy vocabulary,*” (p.13) とも言う。これらの言葉は彼が自他ともに許す作文の書き手であると同時に、教師によっては彼の英語の能力を同学年の水準以下とみなすおそれもあるくらいに、未熟と成熟の入りまじった特異なものであることが想像できる。

コトバと環境

問題をかかえた子ではあるが、基本的にホールデンは、家庭環境や個人の資質からして悪い言葉を使うべく生まれついてはいない。そこで、良い

言葉悪い言葉の違いを明らかにしておく必要が生じるが、この作品はアパーミドルクラスの世界を中心として、悪い言葉を使うような無教養の人はあまり出てこない。比較的社会的地位の低い人達といえば、タクシーの運転手、ホテルの従業員、会社の女子事務員等になるが、彼等の話しぶりをみてみると、“wudga,” “toleja,” “trynna”といった発音のくずれが目立つ。他は、文法的には会話ではとかく避けられない二重否定がやや多いくらいで、特に目立った違いはない。特に、というのは、上記のくずれた発音や禁句の使用は、エリート高校のホールデンやその仲間達もけっこうやっているからである。

そこで、言葉の使用に関していえば、教育を受けた人とそうでない人との違いは、前者が悪い言葉を知らないということではなくて、悪い言葉も知っているが、良い言葉と使い分けができるという点にある、ということが考えられる。ホールデンはかなり悪い言葉を使うが、無自覚に使っているわけではない。それが証拠に、彼は使ってはいけない場合、たとえば年長者に対しては然るべき言葉に切り換えている。子供はもともと良い言葉、悪い言葉の違いがわからず、人間社会の中で生きる限り、自然環境の中でいやでも応でも汚染物質をとりこまざるを得ないように、悪い言葉が耳から入ってくる。ちょうどホールデンが“Fuck”の文字を妹の目にふれさせまいと必死の努力を払って、結局はそれは不可能だと悟ったように。そういう無防備な人間が善悪の区別がつくようになるのは、一重に教育の力である。教育においては教師の指導が大切だが、日常の言葉遣いに関しては、家庭における親のしつけがより大きな影響力をもつ。ホールデンの家では、このしつけがかなり行き届いているようだ。次の母と娘(ホールデンの妹フィービー)の対話をみてみよう。

“How was your dinner?”

“Lousy.”

“You heard what your father said about using that word.” (p.184)

“Lousy”を「ひでえ」という日本語に置きかえてみれば、たしかに小さな女の子がこんなことを言ったらギョッとする。しかしこの lousy はホールデンが最も頻繁に使う単語の一つなのである。

ホールデンの言葉の悪さは相当なもので、それはやがて事例によって検討してゆくことになるが、その一方では育ちのよさと、言葉の才にたけて

いる半面をちらちらとのぞかせることもある。言葉の悪さは、この年代に特有の偽悪家ぶることに快感を覚える心理と、ホールデンの場合はそれに加えて大人の世界に対する抵抗の姿勢の表われでもある。彼は典型的なツッパッタガキだ。ホールデンにおける口語表現の研究はツッパリの言語の研究ということにもなる。彼にとってことさらに悪い言葉を使うのは、かっこよさを気取ってそうしている面があり、従って同じ悪い言葉でも、そのかっこよさを台無しにするようなもの、つまり本当の無知・無教養から発する悪い言葉は、意識的に遠去けられなければならない。しからばそれはどのようなものであろうか。

彼の級友の一人は、親が“he don't,” “she don't” (p.142) という言い方をし、またあまり裕福でないことを恥じていたという。その級友は、そのことによって自分が親の学歴や収入の点でエリート高校の出身階層から外れていることを自覚していたのだ。ここから、ホールデンが所属する文化水準の人達にとって一番嫌われるのが、この手の極めて初歩的な文法の誤りであることが推測できる。

ホールデンのような知識階級の間人が軽蔑する文法的誤りのもう一つの例として、“It's a secret between he and I.” (p.194) がある。しかしこれはホールデンの教師アントリーニがホールデンの嫌いそうな言葉の例として挙げたもので、ホールデン自身はそういうことはない、と否定している。事実彼自身“‘She'd give Allie or I a push.’” (p.73) “I think I probably woke he and his wife up.” (p.181) という言い方をしている。これについては、Costelloのようにむしろホールデンの文法意識過剰からきた“hyperform”とする見方もある。そうすると“It's a secret between he and I.”こそ him and me よりも he and I を優先させる hyperform であり、アントリーニ先生の忠告は、ホールデンの学校嫌いが高じて教育の一切合財を否定してしまう悪しきニヒリズムに陥ることを戒めたとも考えられる。アントリーニ先生がホールデンと対話をするところは、アントリーニ先生の饒舌と奇妙な行為によってホールデンばかりか読者をも混乱させる場面であるが、師弟を含めたこの階層の人達の言語に対する感覚は、一般庶民のそれとはいささか違ったもののようにも受けとられる。

Death of a Salesman との比較

The Catcher は第二次大戦の記憶も生々しい時期に書かれたが、その頃どういう slang が流行していたか。それを知るために、ほぼ同時期に発表された *Death of a Salesman* と *The Catcher* とに共通する slang が *American Slang* の編集者からどのくらい注目されたかを調べてみると、次の四つの slang が見つかった。(上が *The Catcher*, 下が *Death of a Salesman*, 共にペンギン版, *は *American Slang* に引用されている文)

1. crap

If you really want to hear about it, the first thing you'll probably want to know is where I was born, and what my lousy childhood was like...and all that David Copperfield kind of *crap*. (p.5)

I'm not interested in stories about the past or any *crap* of that kind.* (p.84)

2. big deal

The game with Saxon Hall was supposed to be a very *big deal* around Pency.* (p.6)

My brother pulled off a *big deal* today, I think we're going into business together.* (p.79)

3. hot-shot

They advertise in about a thousand magazines, always showing some *hot-shot* guy on a horse jumping over a fence. (p.6)

Well, let's face it: he's no *hot-shot* selling man.* (p.52)

4. phony

One of the biggest reasons I left Elkton Hills was because I was surrounded by *phonies*.* (p.18)

You—liar!...You fake! You *phony* little fake!* (p.95)

これらはその当時新鮮な響きをもっていたものと思われる。特に *big deal* は、この頃人気のあった Henry Morgan のラジオ番組, Milton Berle のテレビ番組に出演した Arnold Stang がギャグの中で盛んに使ったことが流行のきっかけになったという (*American Slang*, p.34)。 *The Catcher* も *Death of a Salesman* もニューヨークを舞台とし、共に高校生が登場する。ただホールデンの家はアパーミドルクラス、ビフの家はロウアミドルクラ

スで、ホールデン一家のほうはずっと高学歴である。しかし *Death of a Salesman* にはあまり過激な slang は出てこない。戯曲として舞台から直接多くの人の前にさらされることからくる制約もあるだろうが、一般に庶民階級のほうが日常の言葉遣いに気をつける傾向があるともいえる。上流階級の子弟が不良じみた言動でイキがるのは、彼等の特権意識の表われであり、まじめに働かなければ食っていけない庶民の子にはそんな余裕はない。だからビフの父親のように息子の言葉遣いに口やかましく干渉するようなことも起る。ビフはホールデンにくらべれば世間に対してずっと小心である。金持のお坊ちゃんホールデンには人を人とも思わぬところがあり、それが彼の言葉遣いの端々ににじみ出ている。

ホールデンの語りの基本的スタイル

先に述べたように、この作品は主人公ホールデンの語りを地の文として成り立っているから、どの頁にも彼の語り口の特徴が一杯つまっている。そういう中から最もホールデン的な一節を選ぶのは容易でないが、いくつかの要素が比較的まとまって出ていることに注目して、次の一節によってまず彼の語りの基本的スタイルを検証してみよう。

We once double-dated, in Ed Banky's car, and Stradlater was in the back, with his date, and I was in the front, with mine. What a technique that guy had. *What he'd do was*, he'd start *snowing* his date in this very quiet, sincere voice—*like* as if he wasn't only a very handsome guy but a nice sincere guy, too. *I damn near puked*, listening to him. His date kept saying, "No—please. Please, don't. Please." But old Stradlater kept snowing her in this *Abraham Lincoln*, sincere voice, and finally there'd be this terrific silence in the back of the car. It was really embarrassing. I don't think he *gave that girl the time* that night—but *damn near. Damn near.*

(p.53 イタリックは向井、以下同様)

ちなみにストラドレーターはホールデンのルームメイトで、ホールデンに言わせれば自信過剰で無神経な男。ここに引用するのはその彼と一緒にデートして、彼がガールフレンドに迫る手口を目撃する場面である。1頁の3分の1程度の短かい文章であるが、その中にこのあといくつかの項目

に分けて検討することになる要素のほとんどが含まれている。それらは、

1. slang の使用

ここで slang というのはすべて *American Slang* に記載されているものであるが、同じ slang でも “They kicked me out.” (p.7) (*American Slang*, p.304) のように、辞書を引かなくても単語から容易に類推できるものと、辞書を引かなければ理解困難なものがある。slang をそういうイデオマチックな slang に限定しても、この短い章節の中に二か所も出ている。

1) *snow* : to talk at length on a subject to a person who is uninformed in order to deceive or impress the person (*American Slang*, p.497)

2) *give* [someone] *the time* : to have sexual intercourse with someone (*American Slang*, p.546)

2. 禁句の使用

damn を立て続けに三回も使っている。

3. 品詞の転用

1) 形容詞を副詞に *near puked, damn near*

2) 名詞を形容詞に *this Abraham Lincoln, sincere voice*

3) 前置詞を接続詞に *like as if he wasn't only a very handsome guy...*

4. 心と体の直結

ホールデンの言葉にはとにかく過剰な感情表白がみられるが、その一形態として感情を肉体の生理現象に直結させて表現する。

I damn near puked, listening to him.

5. 前置き

What he'd do was, he'd start snowing his date...

比較的長い説明をする前に、前置きの短い言葉を添える。これはホールデンが最も頻繁に用いる表現の一つで、ちょうど噺家の「何々はってえと」という口調に似て、語りの口調をなめらかにする効果をあげている。

6. 反復

I don't think he gave that girl the time that night—but damn near. Damn near.

7. ヒューモアとウィット

好色，ふしだらな場面に突如謹厳なリンカンが出てくるおかしさ，その対比の妙，これはこの場面に限らず，そもそも対象を滑稽化して眺めるのがホールデンの著しい特徴である。人間はもともと矛盾した存在であるから，人生の様々な局面においていろいろおかしなことが現われる。それを的確にとらえるには，さめた目をもつことが必要であるが，同時に自分自身もその矛盾の共有者であるという自覚がなければ，観察が表面的で読者の共感を誘うことができない。“What I like best is a book that’s at least funny once in a while.” (p.22) という彼の言葉は，そういう読者の共感を誘うに足る内容を指摘したものと解釈したい。

以上の分類は，最後の項目がホールデンの最も個性的な部分にかかわりがあるように，順を追って一般的なものから個性的な色合いが強くなるように配列したつもりである。同様に，以後の項目別の検討においても，順次，一般的な口語表現からより個性的なものへと，視点を移してゆくことにする。

Lousy Vocabulary

slang はその即物性と党派性のゆえに，もともとはやりすたりのある言葉であろう。しかし大変息の長い slang もある。“lousy”はホールデンが好んで使う単語だが，これは OED によると louse から発してチョーサーの時代から既に用いられていたことがわかる。同時に現代人ホールデンも頻繁に用い，妹までがこれを使って母にたしなめられるといった現代の言葉でもある。*American Slang* でも，他の新らしい slang なみに完全な現代語として扱っている。この歴史の古さと，現代性を併せ具えている点で，lousy は slang 中での王座を占めるといえるだろう。

さらに lousy をして slang 中の slang たらしめるのは，連想が不潔なことである。lousy はもともと「シラミがウヨウヨ」という感覚をもった言葉と想像できるが，今日では人間の存在までもおびやかす強力な薬剤の登場によってシラミが駆逐されてしまい，そういう連想は極めて稀薄になってしまった。その意味では

That hotel was *lousy with* perverts. (p.66)

は本来の語感を残した使い方といえる。

それ以外のやたらと連発される lousy に、どれだけ本来の不潔感から発するインパクトがあるのか、ネイティブ・スピーカーならぬ者には実感することがむずかしいが、slang は基本的に使用する側にとっても、公序良俗に挑戦するリスクの伴う危険性を含んだ言葉であろう。

偽悪家をよそおい、人を人とも思わぬホールデンがこの種の言葉を使いたがるのには理由がある。ホールデンの言葉の検討は、まずこの分野から始めたい。そしてそれを slang という言葉で規定されるものよりやや範囲を拡げて、彼自らの言葉を用いて“lousy vocabulary”と呼ぶことにする。

1. hell, goddam . . .

まず、ホールデンの会話には聖の領域に立ち入る言葉が盛んに飛び出す。

my whole *goddam* autobiography (p. 5)

It cost *damn* near four thousand bucks. (p. 5)

これらの goddam, damn は文の構成に全く関係がないが、

I don't give *a damn*. (p.13)

の damn は文の構成にかかわりがあり、内容的には、別の言葉の代用、あるいは省略されたものと考えられる。意味は別の部分におけるコンテキストが明らかにしている。

I'm the type that *doesn't give much of a damn* if they lose their gloves. I *never care too much* when I lose something. (p.94)

つまり give a damn は care (ただし使用する場合は否定の形でのみ) のことであることが判る。これもホールデンが好んで使う言葉である。なお、ここで give a damn を care で言いかえるかたちで繰り返したことについては「反復」の項で別の観点から考察する。

She scared *hell out of* me. (p.183)

...my Gladstones kept banging *hell out of* my legs. (p.57)

上の二つの文では hell out of は文の構成にかかわりなく、そっくり抜き取ることができるが、

I wanted to get *the hell out of* the room. (p.14)

では文の構成にかかわりのないのは the hell までで、out of は抜き取ることができない。

damn, goddam, hell はこの他にもたくさん使われていて、あまり頻繁に使われるものだから、かえって禁句のもつ衝撃的なインパクトが薄れて

しまう。使う本人もほとんどが無意識に使っているのであろうが、初めて聞く者、あるいは妹フィービのように久し振りで聞く者には不快な感じを与えずにはおかないのであろう。フィービは再三にわたって“Don't swear so much.” (p.175) “Stop swearing.” (p.178, 179) と注意を喚起している。

また、そういう言い方しかできないというのは、語彙の貧弱な幼稚さの表われであり、ホールデンの“lousy vocabulary”の lousy は、「きたない」に加えて「お粗末」の意味もある。かくして、彼の不良っぽさと同時に、子供っぽさも増幅されていくことになる。

2. and all, or something . . .

同じ言葉を頻繁に使う、裏返せば、それしか言い方を知らないことが幼稚さの表われだとすると、次の用語もそうした観点からとらえることができる。

They're nice *and all*. (p. 5)

Anyway, it was December *and all*. (p. 8)

His door was open, but I sort of knocked it anyway, just to be polite *and all*. (p.11)

You were supposed to commit suicide *or something* if old Pency didn't win. (p. 6)

It was that kind of a crazy afternoon, terrifically cold, and no sun out *or anything*. (p. 9)

かつて全共闘のアジ演説の中で、言葉の終りに「等々」をつけるスタイルがはやったが、それは彼等が何かを言い終っても、まだ言い切れぬ想いが胸の中に残っているのを意識していたためかもしれない。ホールデンの口癖も、想いばかりが先走って、言葉がそれについていけぬもどかしさの表われともみることができる。

3. 肉体的連想

The Catcher が発表された戦後間もない頃、私はある学校で、水泳部員がプールで泳ぎながら水が冷たくて「頭にきた」と言うのを聞いた。「頭にきた」という表現に接したのがこの時が初めてであった。だがこの場合の「頭にきた」は、水が冷たくて頭が痺れたか、痛くなったかしたことで、明らかに肉体の生理現象そのものだったのである。(酒に悪酔いするのも「頭

にくる」と言っていたようだが、これも生理現象) その後「頭にきた」は、「腹が立つ」のより直截な言い方として使われるようになったが、この言葉には奇妙な生々しさがある。第一に、この言葉は決して品のいい印象を与えない。

怒りと頭を直結させるのは適切でない、あるいは、感情を簡単に頭までのぼらせるような人は慎しみが無い、という気持ちがわれわれにあるのかもしれない。ホールデンがしばしば心の動きを肉体の一部に突出させて表現する時、それに似た印象を受ける。しかしそれは彼の直情径行さの表われでもあるのだろう。

It got on your *nerves* sometimes. (p.11)

I damn near *puked*. (p.53, 既出)

...which is something that gives me a royal pain in the *ass*. (p.32)

My *ass*! (p.13)

ass はそれ自体品のいい言葉ではないから、感情の表出でなくても、使えば下品に聞える。

I kept standing...and freezing my *ass* off. (p. 8)

He was a nice old guy that didn't know his *ass* from his elbow. (p.12)

「尻がちぎれる」どころか「殺される」となれば、いよいよ事は重大だが、

It killed me. (p. 3, 他多数)

はホールデンにおいては嫌悪と好感ほぼ同じ比率で使われている。これは日本語の「参った」が同じように両方の意味で用いられるのに似ている。ホールデンが好感を覚えることが少ないだけに、この言葉は好感の表白として、より大きな効果をあげている。

排泄物への言及も肉体的連想の一環と考えられる。*crap* は本来「糞」の意味で *American Slang* では *taboo* 扱いになっているが、先に引用した *Death of a Salesman* や *The Catcher* の用例では“nonsense”ほどの意味で、あまり不潔な連想はない。次も同様である。

Then I started *shooting the old crap* around a little bit. (p.59)
(shoot the *crap*=to talk, chat *American Slang* p.470)

しかし、大人の会話では、親しい者同士の場合を除いては、次のような言葉は避けるのが普通だろう。

He started handling my exam paper like it was a *turd* or something. (p.15)

The stairs had the same smell...like somebody's just *taken a leak* on them. (p.207)

Then all of a sudden this guy sitting in the row in front of me laid this terrific *fart*. He damn near blew the roof off. (p.21)

ウンコ、オシッコ、オナラのたぐいを口にするのは子供っぽいことに違いない。しかし *fart* の動詞に *lay* を使ったのは子供っぽいとはいえない。おそらく *lay a bomb=drop a bomb* (*American Slang* p.314) からの連想で、それによって次の「屋根が吹っとぶ」の言葉が生きてくる。われわれもこういう時には「一発ぶっぱなす」と言う。

4. 誇張

ホールデンの語り口調は、基本的に抑制がないという意味ですべてが誇張であるが、その誇張の種々の形態を明らかにするために、敢てこの項目を作った。まず数量的な誇張から、

He made a speech that lasted about *ten hours*. (p.20)

I dropped about *a thousand hints*. (p.41)

It took him about *five hours* to get ready. (p.40)

this big, gigantic bed that's about *ten miles wide and ten miles long* (p.165)

some old lady around *a hundred years old* (p.208)

これらはあまり使い過ぎると陳腐になる。

ちょっと変ったところでは

I'd spent *a king's ransom* in about two weeks. (p.113)

次の反語的誇張は一ひねりしているだけ高度な表現ということになる。

That Morrow was about as *sensitive* as a goddam *toilet seat*. (p.59)

All she had on was jeans and about *twenty* sweaters. (p.124)

She was about as *kind-hearted* as a goddam *wolf*. (p.145)

He was a skinny little weak-looking guy, with wrists about as *big* as *pencils*. (p.177)

「好き」を「夢中になる」とエスカレートさせた上で、否定的に使う。

I'm *not crazy* about talking to girls' mothers on the phone. (p.122)

I wasn't *too crazy* about doing it, but I couldn't think of anything else. (p.43)

その同類として、

He *never exactly broke your heart* when he went back to his own room. (p.29)

人間以外の物体に人間的属性を与えて己の感情をぶつける。

right next to this *crazy* cannon that was in the Revolutionary War (p. 6)

I was sitting on his *stupid* towel. (p.35)

I heard his goddam *stupid* footsteps coming... (p.44)

Costello は、総じてホールデンのレトリックは“trite”で“unimaginative”だと言う。誇張はストレートな誇張であれ反語的誇張であれ、何度も聞かさればうんざりする。ホールデンは誇張のためによく比喻を用いるが、これも結局は限られた言い方を繰り返しているに過ぎない。

I apologized *like a madman*. (p.77, 119)

I went right on smoking *like a madman*. (p.46)

madman には数の一致がある。

The closet's full of *hangers* that rattle *like madmen* when you open the door. (p.165)

しかし性の一致はない。

She's a *madman* sometimes. (p.215)

その他、like a bastard, like a fiend, like hell, like mad が思いつき次第で選択されるが、次のように若干のニュアンスの違いもみられる。

I was shivering *like a bastard*. I always shiver *like hell* when I'm drunk. (p.158)

最初の文は特定の出来事に関して、二番目は一般的事実を述べている。like a bastard のほうが like hell より具体的で、「ガタガタ」という感じが伝わってくるようだ。

とかくワンパターンになりがちなホールデンのレトリックも、時々着想が当たって、意外性、対比の妙によって興を添えることがある。

They have this day, Veteran's Day, that all the jerks that graduated from Pency *around 1776* come back... (p.175)

The other one, old Marty, was like *dragging the Statue of Liberty* around the floor. (p.78)

All you have to do to my mother is cough somewhere *in Siberia* and she'll hear you. (p.165)

そして先の *Abraham Lincoln*, sincere voice もある。

陳腐な言い方でも、場合によってはピシャリときまることがある。

Everybody was clapping *their heads off*. (p.89)

Everybody was smoking *their ears off*. (p.132)

は誇張にしてもあまりイメージを喚起する力をもたないが、

The Rockettes were *kicking their heads off*. (p.143)

のように、ラジオシティ・ミュージックホールの踊り子たちがラインダンスで一斉に足を高々と蹴上げている光景になると、俄然生々とした描写力を発揮する。

抽象的なことを具象化して言うのは基本的にホールデンの想像力の豊かさを示すものだろう。好きなガールフレンドが身持ちの固いしっかりした娘であることについて、

I knew she wouldn't let him get to first base with her. (p.84)
や、老教師スペンサー先生との対話で世代の断絶を感じるところで

We were too much on opposite sides of the pole. (p.19)
などは、同世代の水準以上の表現力ということができる。

5. 反復

誇張と並んで、反復もホールデンの性急な語り口の特徴である。

He was sore as hell. He was really furious. (p.45)

All the athletic bastards stick together. In every school I've gone to, all the athletic bastards stick together. (p.47)

The blond was some dancer. She was one of the best dancers I ever danced with. (p.75)

次も別なかたちの反復である。

He still didn't say *one single solitary* word. (p.45)

You're a *dirty stupid* sonuvabitch of a *moron*. (p.48)

Get your *dirty stinking moron* knees off my chest. (p.48)

反復は強調の手段であると同時に、意味を補足し、徹底させる目的をもつ。このために反復された部分には意識して前より正確な言葉を用いることがある。

I'm the type that *doesn't give much of a damn* if they lose their gloves. I *never care too much* when I lose something. (p.94, 既出)

Phoebe *killed* Allie, too. I mean he *liked* her. (p.73)

年長者との会話では、始めに正統的な言い方をしてから、気持を楽にして、くだけた言い方になることもある。

I *don't like them* to stick too much to the point. I *don't like it* when somebody sticks to the point all the time. (p.190)

ホールデンは後のほうの言い方を、次の例のように何度もしているから、これが彼の日常的な言語である。

I *hate it* when somebody answers that way. (p.19)

He *didn't like it* when you called him 'Ackley kid'. (p.24)

It *drove him carzy* when you broke any rules. (p.45)

順序がどうあれ、ホールデンがこのように一つのことを伝えるのに二通りの言い方をするのは、それだけ彼がコミュニケーションに気を遣っていることの証拠とみることができる。

またホールデンの場合、反復された部分が前の部分から引き出された結論の意味をもつことがある。この時には *always*, *never* のような副詞を伴なう。

She said, "I have a marvellous idea!" She was *always* having a marvellous idea. (p.134)

But he wouldn't believe me. People *never* believe you. (p.40)

ここには彼の「いつもそうなんだから」という不満な気持が表われているが、そうすることによって他ならぬ彼自身が性急に結論を出し、物事を一方的にきめつけるあやまちを犯しているのである。ここにも彼の未熟さがみられる。おそらくそのことを彼が自覚する時、彼の成熟への道が開かれるのであろうが。

これらの口癖はツッパリ少年の反面の淋しさをのぞかせている。自分の想いが人に伝わらぬ淋しさを——だからこそ *to tell you the truth, if you*

want to know the truth, in case you don't know, if you really want to know, if you know what I mean のような言葉も絶えず出てくるのだ。

しかし、そう言いつつも、時に彼特有のヒューモアでしめくくるのがホールデンらしいところである。

I'd only been in about two fights in my life, and I lost both of them. I'm not too tough. I'm a pacifist, *if you want to know the truth.*

(p.49)

以上の考察から、ホールデンの lousy vocabulary にもとづく英語は、限定された用語の多用によって基本的に幼なさから脱却していない印象を与えるが、単純な言葉遣いが同時に率直で明快な語り口を生み、随所に見られるヒューモラスな記述と相まって、機智に豊んだ、頭のよい語り手の人間像を浮き上がらせているということが出来る。

Faulty Structure

前段階において、ホールデンの口語表現を、主として用語の観点から考察した。そして彼独特のレトリックを、若さに多かれ少なかれ共通する直情性や、言葉の選択に時間をかけることのできない口語一般のもつ雑駁性と、ある程度関連づけながら分析した。

次に彼の語りの言語を構造の面からみてゆく。構造の面からとらえるということは、基本的には文法の法則に照らしてみることであるが、ここでも努めて個性的な語り口の発見に意を注いで、単に既成の文法概念を当てはめるのではなく、現実の言葉の中から、語り手の心理に即した言語の構造を引き出すことを試みるつもりである。

まず、口語表現の構造について基本的な認識をもっておこう。一言で言えば、それは用語の場合と同じく、非公式性ということが特徴としてあるだろう。構造に関しては、非厳密性と言ってもいい。それは会話の即時性からくるところの不可避的な現象である。いかに言葉に熟達し、頭脳明晰な人でも、その場で浮かんだアイディアを直ちに文法的に完璧な文にして話すことはむずかしい。しかし文法的誤りにも、前に述べた *he don't, she don't* のような許されない誤りと、会話においては許される誤りとはあるであろうし、中には誤るほうがむしろ自然であるとして、会話のスタイルとして主流になったものもあるだろう。

しかし誤りはあくまでも誤りとみるならば、口語には許されざる誤りから許される誤りまで（それを決定するのが誰であるか私にはわからないが）かなりの幅をもった非厳密性が見出されるであろう。それらをひっくるめて、今度は Costello の言葉を借りて“faulty structure”と呼ぶことにする。

1. 気ままな造語

Costello は言葉に関する“adaptability”は「アメリカ的特質」だと言う。またホールデンの言葉遣いには「抑制がない」と言う。従ってホールデンの特徴は「抑制のない応用力」の発揮にある、ということになる。

そのことについても、既にある程度は明らかにされた。今度はそれを structure の面から更に検討してゆくのである。

まず明らかな誤りから始めよう。

I *laid* around in bed for a while. (p.111)

She was *laying* there asleep. (p.166)

There was James Castle *laying* right on the stone steps. (p.177)

ホールデンは別のところで I saw Jane *lying* on her stamock. (p.81) と言っていないながら、どういうわけかこのような間違いを三度も犯している。

これらは弁解の余地ない間違いであろうが、height の代りに heighth を三度も使っているのは eighth との連想による hyperform かもしれない。

It was partly a phoney kind of *friendly*. (p.29)

はうっかりミスで、別のところでは

It's a funny kind of yellowness. (p.95)

と正確に言っている。

ホールデンの応用力は、名詞に片端から y をつけて形容詞にしてしまう。ただ、このかたちはもともと数が多いから、どこまでがホールデン自身の造語か判断に迷う。

fisty, crappy, perverty, Christmasy, show-offy
は普通の辞書にはない。

snobbish は無視されて snobby となる。

y に looking を加えたかたちもよく使われる。

vomity-looking, flitty-looking, whorey-looking, pimpy-looking

みんないかかわしい内容のものばかりだ。

名詞をそのまま形容詞や副詞として使う場合もある。

this *Abraham Lincoln*, sincere voice (p.53, 既出)

She sings it very *Dixieland* and *whorehouse*. (p.121)

しかし

this very high-pitched, *yellow-belly* voice (p.109)

になると、本人は y をつけたつもりで言っているのかもしれない。

American Slang には warmer-upper, winder-upper という slang が出ている。passer-by, looker-on の原則に照らせば up に er をつけるのは間違いだが、ホールデンは

That magazine was some little *cheerer-upper*. (p.202)

という単語を使っている。彼自身の造語であろう。しかし上記の例があるから、y と同じタイプの応用と言える。これは up にかなり動詞的な感覚があるためであろう。

underneath the guy on the horse's picture (p. 6)

the blond I'd been dancing with's name (p.77)

これらもかなり強引なやり方だと思うが、someone else's の例もあるから、やはりホールデン式応用力の発揮ということになるだろう。

2. 省略

省略は口語に共通した現象であるから、特にホールデンに限ったことではないが、口語一般の省略の状況を知るために、彼がどういうところを省略しているか、みてみよう。

so...that...の that は例外なしに省略される。

目的を表わす so that は数多く使われるが、so that のままか、that を省略したかたちが同じ比率 (ほぼ10:10) で使われる。それぞれ一つずつ例文を掲げる。

He shoved my book with his hand *so that* he could see the name of it. (p.25)

I got up closer *so* I could hear what he was singing. (p.121)

so が省略されるのは次の一件だけである。

He started these undertaking parlours all over the country *that* you could get members of your family buried for about five bucks apiece. (p.20)

しかしこれは関係副詞 where の代用としての that とも解される。

the reason のあとに why はつけない。that も使わない。why がつくのは次の一件だけ。

It's one of *the reasons why* I roomed with a stupid bastard like Stradlater. (p.115)

これは stupid bastard との関係で、この why が単なる why でなく、why on earth といった強い調子のものであるためだろう。ホールデンは決して思いつきで省略したり、しなかったりしているのではない。

彼がしばしば hyperform 的な言い方をするのも、言葉に対する配慮の表われであろう。次がその一例である。

I know a lot of guys at Pency *I thought* were a lot handsomer than Stradlater. (p.31)

ここでは主格の who が省略されているが、そもそも who I thought were... と言うところに無理があり、言葉の流れとしては whom I thought... となるほうが自然であり、そこから省略の動機が生じたものと思われる。

A Comprehensive Grammar of the English Language (Quirk, Greenbaum, Leech, Svartvik 編, London, 1985, 以下 *Comprehensive Grammar* と略称) にも同様の例文が載っており (同 p.1298), 私がアメリカで知り合った教養ある婦人からの手紙の中にも “Here enclosed is a column from the San Francisco Chronicle *I thought* perhaps would make you smile.” という一文があったから、ネイティブ・スピーカーには特に気になることはないのだろう。

I've left schools and places I didn't even know I was leaving them. (p. 8)

も同じような動機から I didn't even know にひきずられて目的格の関係代名詞を省略するように錯覚したのだろうが、この文の後半は before でつなげるか、without を使った別の構文にすべきである。

3. Hyperform

上記のような省略もあるが、考え過ぎの結果は、むしろ不必要な語を加えてしまう場合が多いのではないか。そのような動機によるとみなされる場合は、一種の hyperform と言えるだろう。

this guy I'd lent my typewriter to (p.56)

That's what I wrote Stradlater's composition about. (p.42)

これら最後の前置詞はとってつけたような感じである。

that—clause の頭の that は、最初はつけなくてもいいが、that—clause があまり長くなると、新らしい clause と勘違いして途中で that をつけたくなるものらしい。

You think if they're intelligent and all, and have a good sense of humor, *that* they don't give a damn whose suitcases are better, but they do. (p.115)

もちろん if から but they do の前までが一つの that—clause である。

次は話しているうちに前の部分の構造を忘れて、別なかたちでつなげてしまった例である。

After he left, I put on my pyjamas and bathrobe and my hunting hat, and *starting* writing composition. (p.41)

しかし次の例は、理屈には合わないが、むしろこのほうが自然に思える。

I didn't feel like *being* lectured to and *smell* Vick's Nose Drops and *look* at old Spencer in his pyjamas at the same time. (p.14)

and all がホールデンの口癖であることは既に述べたが、この all が次の言葉を引き出す引き金になって、結果として all が宙に浮いたようなかたちになっている例がある。

While the father kept giving him a lot of advice, old Ophelia was sort of horsing around with her brother...teasing him and *all* the while he was trying to look interested in the bull his father was shooting. (p.123)

おそらくホールデンはいつもの口癖で

teasing him *and all*, while he was...

と言おうとしているうちに、混乱して

teasing him, *all the while* he was...

と言っているように錯覚したらしい。

否定のための二重否定も言い過ぎのたぐいである。ホールデンは二重否定そのものは使わないが、hardly に関して次のような例がある。

I *didn't* see *hardly* anything on the street. (p.86)

not でなくても、at all との混用も不合理である。

I could *hardly* move my fingers *at all*. (p.9)

そして三者混用の例もある。

She didn't say hardly anything at all. (p.79)

こうみてくると、どうやらホールデンは *hardly* を強い否定の意味で使っている。これは *rather* が使いようによって断乎とした響きをもつものと同じ心理現象といえるかもしれない。

somebody の代名詞に *they* を用いるのも、*somebody* の数の概念が曖昧なところからくる、ある程度自然な現象といえる。ホールデンはこれを一度使い、

It's pretty disgusting to watch somebody pick their nose. (p.14)
クラスメートも使ったように書いている。

I can't just tell somebody they can sleep in his goddam bed if they want to. (Ackley) (p.51)

天気の様子をたずねるのに *What is it doing?* と言うだろうか。 *It rains. It snows.* から類推すれば可能である。ホールデンは

What the hell's it doing out? (p.29)

と言っている。ただし、これだけでは相手に通じないと思ったのだろう、すぐそのあとで *snowing?* とつけ加えている。これは日本語で「外はどうなってんの？」と言うようなもので、それだけではコミュニケーションは不完全に終るが、補助的な言葉を使うか、コンテクストの中でなら理解可能となる。

4. *like*=*as if*

Comprehensive Grammar によると *like* を *as* や *as if* 代りに用いるのはアメリカ英語では珍らしくないという (同書 p.662) が、*like* の使用はホールデンの用語の中でかなり目をひくものの一つである。

I still act sometimes like I was only about twelve. (p.13)

He started handling my exam paper like it was a turd or something. (p.15, 既出)

The auditorium always smelled like it was raining outside. (p.126)
like ほどではないが *like as if* も使われる。

Like as if all you ever did was play polo all the time. (p.6)

...*like as if* he wasn't only a very handsome guy, but a nice, sincere guy, too. (p.53, 既出)

Costello はこれを“extra words”の使用と言っている。extra words (複数) とは as if のことで、従って Costello は like の使用自体については特に異議を唱えないものと思われる。

一度だけ as if が用いられるケースがある。

...hating everybody who comes in looking *as if* he might have played football in college. (p.193)

しかしこれを言ったのはホールデンでなく、英語の教師アントリーニである。

like に続く動詞は普通の過去形で、仮定法のそれではない。しかしただ一度だけ

If I *were* a piano player... (p.89)

と言っている。これは仮定ということをはっきり意識しているからであろう。ここでも、ホールデンが言葉の使い方に決して無頓着でないことを示している。

as if の代りに使った like は接続詞であるから、これは品詞の転用といえる。また次のような転用もある。

On account of it was Sunday... (p.123)

I wasn't supposed to come back, *on account of* I was flunking four subjects. (p.7)

本来の前置詞としての使用もある。

On account of that injury I told you about. (p.47)

しかしこれは一回きりで、接続詞的用法が上記を含めて三度もあることを考えると、ホールデンの on account of の使い方はかなり特殊だといえることができる。

5. 関係代名詞 that

関係代名詞の使用に関してもホールデンにはかなり独自の傾向がみられる。まず特定の先行詞に続く関係代名詞は、先行詞が人であっても人以外の物であっても、ほとんどが that である。

I and this friend of mine, Mal Brossard, *that* was on the wrestling team... (p.39)

...and a lot of phoney girls named Linda or Marcia *that* are always lighting all the goddam Davids' pipes for them. (p.57)

What I like best is a book *that's* at least funny once in a while.
(p.22)

さすがに先行する部分の内容を受けた場合には *which* が用いられる。

I told him to wash his own moron face — *which* was a pretty childish thing to say.
(p.49)

who を使った場合が一度だけあるが、それはアントリーニの言葉である。

...*hating everybody who* comes in looking as if he might have played football in college.
(p.193)

この文は *as if* を使った唯一の例としても既に引用した。この二点によって、アントリーニの言葉遣いとホールデンのそれとが異なるのは作者の意図であることが判る。

whose も使われない。その代りに

He stuck around till around dinner-time, talking about all the guys at Pency *that* he hated *their* guts.
(p.38)

I know this guy down in Greenwich Village *that* we can borrow *his* car for a couple of weeks.
(p.137)

I know this guy *that's* grandfather's got a ranch in Colorado.
(p.172)

6. 前置きとしての副詞節の構造

さて、最後は構文の点で最もホールデンの個性豊かなものを取り上げてこの小論をしめくくりたい。それは「ホールデンの語りの基本的スタイル」のところで「前置き」と題して若干触れたものである。これをホールデン的とする理由は①頻繁に使われる②ほどほどに *faulty* である③しかし原理的なものが一貫していて④全体として語り手が言葉の才にたけた柔軟な思考力の持主であることを示す、からである。まず代表的なものを選んで、全体を文型的に整理して通し番号をつける。

1) The next thing I knew, I was on the goddam floor and he was on my chest.
(p.47)

2) Then what happened, a couple of days later I saw Jane lying on her stomach.
(p.81)

3) So what I decided to do, I decided I'd take a room in the hotel in

New York. (p.55)

4) The reason I noticed it, her pyjamas didn't have any sleeves.
(p.171)

5) Another reason I know he's quite well off, he's always investing money in shows on Broadway. (p.113)

6) What I was really hanging around for, I was trying to feel some kind of good-bye. (p. 8)

7) The way I wore it, I swung the old peak way around to the back.
(p.21)

8) The way I met her, this Doberman Pinscher she had used to come over and relieve himself on our lawn. (p.81)

9) The way she asked me, I knew right away old Spencer'd told her I'd been kicked out. (p.10)

10) I just couldn't hang around there any longer, the way we were on opposite sides of the pole. (p.19)

11) So what I did was, I went down the hall and woke up Frederick Woodruff. (p.56)

12) So what I did was, I went over and bought two orchestra seats for *I Know My Love*. (p.123)

13) The reason I was standing way up on Thomsen Hill was because I'd just got back from New York. (p. 7)

14) The other reason I wasn't down at the game was because I was on my way to say good-bye to my old Spencer. (p. 7)

15) The only way he ever did anything was if you yelled at him.
(p.28)

16) The only way I could even enjoy myself was if I amused myself a little. (p.78)

17) Where I lived at Pency, I lived in the Ossenburger Memorial Wing of the new dorms. (p.20)

1) から10) までの前置きに相当する部分—— 10) の場合は後置き —— は、文の中で果たす機能として副詞節を構成している。かかる接続詞なしの副詞節としては、時間にかかわる副詞節で *the instant*, *the moment* 等

の名詞が副詞節を導く場合がよくある。ホールデンはそれを理由、方法、態様にかかわる分野にまで応用するのである。1) The next thing, 2) Then what happened, 3) So what I decided to do は the instant に準ずる時間的關係において主節を導くものであり, 4) The reason, 5) Another reason, 6) What...for は理由, 7), 8), 9), 10) The way は方法, 態様である。

しかし接続詞を伴わぬこれらの節はそれだけを独立させて考えれば名詞節であるから, そのあとを be 動詞でつなぐことができるし, またそのほうが普通である。それが11), 12)である。

同様に the reason で始まる節も be 動詞でつなぐことができるが, その場合は同格の名詞節でつなぐべきで, that-clause にするのが理にかなっているが, 13), 14)の如くホールデンはすべて because を使っている。しかしこれは非公式な形として認められている。(Comprehensive Grammar, p. 1389)

これがまがりなりにも非公式として容認されるのは, the reason と because が共に理由をあらわす点で同質だからであろう。従って両者が異質なものとなれば一段とすわり心地が悪くなるわけで, それが15), 16)の場合である。the way (方法) と if (条件) との結合に理無があるから, どうもおかしな感じを与えるのである。

これを改めるには両者を同質化して

The only time...was when...

と時間で統一するか,

The only way to...was (to)...

とするかであろう。

17)の文について Costello は“repetition”と言っている。どこが repetition か。repetition とは同じことの繰り返しであるから, 二番目の I lived がこれに当る。また Costello の言う repetition には, 繰り返された部分は不要という含意があるものと解される。つまり二番目の I lived は不要ということになる。

しかしこの文を直す最も簡単な方法は Where を When に変えることである。それだけで, 一応すっきりしたかたちになる。

しかし, この時ホールデンは自分の居た場所を明らかにすることが念頭

にあって、時間的關係を明らかにする発想は全く頭の中になかったであろうし、またその必要もなかった。従って Where を When に変えればいいというのは単なる机上の空論であって、現実にはホールデンがそう言う可能性は全くなかった。Where I lived at Pency はあくまでも変えることのできない Where I lived at Pency なのであり、一たん口から出てしまった以上、あとの部分で辻褄を合わせてゆくより仕方がないのである。

私はこの文も上の一連の形式に連なる、彼独特の「前置き」発想にもとづくスタイルなのだと思う。Where I lived at Pency もまた上の一連の文のように副詞句を形成し、かつ名詞節に転じうる性質もそなえているのである。従ってこのあとに was をつけてつなぐこともできるが、次の I lived …と直接つなげるわけにはいかない。なぜなら I lived…はそのままでは行為をあらわす語句であり、場所と行為の直結は、方法と条件の直結のように異質なものの同士の結合になるからである。よってこの場合は I lived を取って、場所に関する in the Ossenburger Memorial Wing だけを残して

Where I lived at Pency was in the Ossenburger Memorial Wing of the new dorms.

結果として、Coatello が指摘した repetition の部分を取り除いたかたちになった。